

# Ⅲ 研究のまとめ



### Ⅲ. 研究のまとめ

#### 1. 研究主題「自ら問いを持つ子供の育成 ～見方・考え方をいかして資質・能力を高める授業づくり～」について

- <sub>1</sub>よかったです
- <sub>2</sub>良い
- <sub>3</sub>良かったと思います。
- <sub>4</sub>良かったと思います。主体的に思考できるよう課題を設定し、取り組む姿がみられた。
- <sub>5</sub>主体的に学習できる子供たちを育てていく上で、適切な研究主題だったと思う。
- <sub>6</sub>今日的な問題に対応した良い主題だった。「自ら問いを持つ」を意識して、児童の主体的な学習になるよう心掛けて授業を展開してきました。
- <sub>7</sub>子供たちが「問い」を持つことは、学習に自主的に取り組むことにつながっているので、良い研究ができたと思います。
- <sub>8</sub>自分の勉強にとともなりました。まだ、力不足で、児童のやってみたいをもっと上手にできれば良かったと思います。
- <sub>9</sub>まさに適切でした。自ら問いを持つ子供を育てるために、指導者がどんな働きかけをしていけばよいか、考えながら授業づくりに励みました。
- <sub>10</sub>良かったと思う。児童が「自ら問いを持つ」ためには、教師が導入から何か働きかけていかなければならず、それを考えていくことが授業の向上につながった。
- <sub>11</sub>新学習指導要領を見据え、学校が一つの方向に向く主題であった。
- <sub>12</sub>外国語において自ら問を持つということが難しかった。
- <sub>13</sub>今後の指導において課題となってくる外国語について、学校全体で学習することができてよかった。ただ児童自身の「英語でコミュニケーションが取れるよう

になりたい」という意欲は高かった。そこをもっとうまく生かして授業が行えればよかったと感じた。

研究主題については、概ねよかったとの意見が得られた。○<sub>4</sub>～○<sub>8</sub>からもわかるように、「児童の主体的な学習」について多くの記述が見られた。そして○<sub>9</sub>、○<sub>10</sub>においては、その学習の実現に向けて、教師の働きかけが大切、との記述が見られた。これは「しかけ」の項目で詳述する。●<sub>12</sub>、●<sub>13</sub>については、外国語活動についての記述である。児童が自ら問いを持って学習を進めるためには、既習事項を問うことが必要である。今年度、移行措置により3～5学年の児童は初めて外国語活動の学習を行ったため、ほぼ既習事項がない状態で授業を進めてきた。来年度からは2年目の外国語活動の学習となる。既習事項を活用できる授業を意識していくことが求められる。

この研究主題を念頭に置いて日々の授業をつくっていくことが、これからの時代を生きていく子供を育てることにつながり、さらには新 COS の理念を実現することにもつながっている。

#### 2. 内容について

##### (1) 『『育成を目指す資質・能力』の具体的な姿を探る』について

- <sub>1</sub>「思考力・判断力・表現力等」について、算数の導入の中で、既習事項と新しい課題を見比べ、「ここがこれまでと違う」という発見をもとに、めあてを立てる様子が見られた。
- <sub>2</sub>算数の学習を進める上で、ノートや教科書を見直して、既習事項を確認する子供が見られるようになった。自力解決をするときに常に意識して学習活動を行ってきた。
- <sub>3</sub>児童自身が課題をもって学習できるようにするために、算数の導入で既習の内容や前時の内容を振り返り、そこから今日はどんなことを学習するのかを児童た

ちに考えさせる活動や、課題を見て今日のめあて（既習内容と違うところ）を考えさせる活動を行った。かける数が10倍のかけ算について学習したとき、児童の中で「次は両方10倍してないかけ算を学習するのか」という次の問題発見をする姿や、そのときの解決の方法についても今日の学習を使えばできそうだと推測する姿が見られた。またそれが理科の学習の中でもあり、他の教科においても次の問題を発見しようとする姿が見られるようになった。

○<sub>4</sub>面積を求める問題で、三角形・台形の面積を考える際、既習の面積の求め方を使って考えることができた。また、「他にやり方はないかな。」と考える児童や「どんな形でも面積を求められそうだ。」と感想を書いていた。児童の感想から、課題を広げられると学びも深まると思われる。

○<sub>5</sub>ブロック操作、言葉、式、図のなかから自分がやりやすい手段で自分の考えを書く姿が見られた。

○<sub>6</sub>主体的・対話的で深い学びを実現していくためにどのような子供たちを育てていくか、具体的な姿を探り、そのような子供たちを育成のための研究を進めていくことは、必要なことだと思う。

○<sub>7</sub>図・式・言葉など様々な表現方法があり、児童が自ら選択し表現していた。（既得の知識技能との関連）

●<sub>8</sub>問題解決の場面で、既習事項を使い多様な考えで答えを出そうとする姿は見られたが、それを統合的に考えたり結びつけたりできる児童はまだ少ない。そのため最後のまとめを考えられる児童はいつも同じ児童であった。

○<sub>9</sub>外国語では新しい単元に入っても、既習事項をもとにコミュニケーションをとる児童が増えてきました。

●<sub>10</sub>外国語では、習った表現を使い、自分の考えを伝えられるようになった。相手を意識し会話するに至るまでにはまだ大きな課題がある。

●<sub>11</sub>外国語の授業で見通しを持たせることに課題を感じています。英語の言葉をと

らえられない児童が多い中、small talk などでめあてや課題を持つことは難しい作業でした。英語＝分からない＝つまらない にならないような工夫が必要だと感じています。

○<sub>12</sub>友達と相談したり、確認したりしながら、問題解決しようとする姿が見られた。（協働する力）

○<sub>13</sub>自分たちで課題のズレに気付き、答えを求めようとする姿勢が見られたと思います。

○<sub>1</sub>～●<sub>8</sub>については算数科に関する記述、○<sub>9</sub>～○<sub>11</sub>については外国語活動に関する記述、○<sub>12</sub>、○<sub>13</sub>については共通の記述と見てとれる。「育成を目指す資質・能力」には「生きて働く『知識・技能』『思考力・判断力・表現力』『学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の3つの柱があるが、なかでも「思考力・表現力」についての記述が多かった。

「既習事項」という言葉には「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の両者が内在している。新たな課題の解決に向けて、既習の「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を想起し、それらを補完し合いながら学習を進めていくことが大切であり、その学びを児童が実感できたとき、「学びに向かう力」が身に付いた、といえるのではないかと。●<sub>8</sub>の記述にみられるように、より多くの児童が学びの実感を得られるような授業を心がけていきたい。

外国語活動については、移行措置1年目ということもあり、課題が多い。他教科の学習と同じように、教師が系統を理解した上で授業を組み立てられるように授業を組み立てていく必要がある。そのために他学年や中学校の授業を参観する機会を増やしていきたい。

## (2) 『見方・考え方』の具体的な姿を探る』について

- <sub>1</sub> 既習事項の内容を使いながら、本時の課題を解決しようとする。
- <sub>2</sub> 算数の学習の中で1が10個集まって十の位へ繰り上がるという既習事項をもとに、本時の課題を解決した。これまでの考え方と同じように、今回も10が10個集まって次の位へ繰り上がるのではないかという「見方・考え方」を働かせて、解決する様子が見られた。
- <sub>3</sub> 算数の授業で、課題解決が困難な児童に図を用いて考えることを伝えたところ、自力解決のときに数量関係を線図に示して考え、答えを求める式を求めることができるようになった。つまり、文の中の数量関係を図として視覚化し、それを式として整理することができたと考えられる。
- <sub>4</sub> 被加数分解のさくらんぼ計算を説明する際に、「数の小さいほうにさくらんぼを書く。」という見方。
- <sub>5</sub> 割合の授業において、2つの物の値段を比べる時、1000円の50円引きと200円の50円引き、どちらも50円引きは同じだが、50円の価値が違うことに気付く、もとにする量が大切であることを学ぶ姿が見られた。
- <sub>6</sub> 自分の考えや意見と友達の意見を比較する姿が見られるようになった。答えは同じでも解決の仕方が違ったときにどこがどのように違うのか、あるいは同じところはどこかなど話し合うことができるようになってきた。
- <sub>7</sub> 量の学習をした際、身近なものにも発展させて、測ろうとしていた。
- <sub>8</sub> 黒板のスペースを3つに等分する活動を自ら考え、実際に様々な方法で試し、計算していた。
- <sub>9</sub> 教師がまず「見方・考え方」を意識することが大切であると思った。具体的な場面では、比、割合、比例の考え方は全て同じということに子供たちが気付いた。
- <sub>10</sub> 算数の問題(3文)の数的関係が読み取れない児童もいる。○の○は○にあたる。また、他教科において、言葉は書けるが、文章の中で言葉を入れて完成させ

る問題となるとなかなかできない傾向がある。文章を読む力、書く力を併せて指導する必要があると感じた。

- <sub>11</sub> 外国語の「what this?」の学習でクイズを作ったとき、ヒントを考える上で自分たちの使える英語や友達の分かる英語でヒントが出せるといいねと声をかけることで、児童が自分たちのわかる範囲でヒントを出そうと考える姿が見られた。
- <sub>12</sub> 校内研究会において、算数・外国語についての見方考え方とは何かを示してくださったので、それをもとに授業づくりをすることができました。
- <sub>13</sub> 初めのうちは「見方・考え方って何?」状態でしたが、少しずつつかめてきました。外国語に限って言えば、一連の学習を通して日本語で思考を深め、英語で表現するという過程を通して見方・考え方を育てることを目標にしてきました。
- <sub>14</sub> 新学習指導要領において深い学びの鍵として『見方・考え方』が大きくクローズアップされているが、本校が今まで積み上げてきた研究がまさにそのことだと思う。その点でも今の研究を元に他教科にも広げていけたらと思います。
- <sub>15</sub> 研究主任が算数・外国語の見方・考え方を示してくれたので、それを用いて資質・能力を身に付けていく授業づくりを考えていくことは、やりやすかったです。  
(1)でもそうなのですが、もし可能ならば、発達段階に応じた目指す子供像が系統的にあるこの学年ではここまでの力をつけていくとか、ここまで育ってきた子供たちをさらにどのように育てていけばよいか誰がどの学年の担任になってもわかりやすいのかなと思った。

○<sub>1</sub>～●<sub>10</sub>については算数科に関する記述、○<sub>11</sub>については外国語活動に関する記述、○<sub>12</sub>～●<sub>15</sub>については共通の記述と見てとれる。これらの記述を見ると、一人一実践や各ブロックの研究授業、さらには管理職の先生方や指導主事からのご指導を通して、日々の授業から「見方・考え方」を意識した授業を行ってきたことがわかる。H29告示「学習指導要領解説 算数編」を見ると、資質・能力を身に付けるための「見方・考え方」が詳細に載せられている。教材研究の際、教科書の指導書だけでなく、読むようにしたい。●<sub>15</sub>にもあるように、系統の理解も大切である。

### (3) 「自ら問う」について

- <sub>1</sub>適切だった。
- <sub>2</sub>良かったと思います。
- <sub>3</sub>適切だったと思います。
- <sub>4</sub>適切だったと思う。
- <sub>5</sub>教科書にそった授業をしていると、児童も私も書かれていることに則って・・・という授業になりがちでした。それでも、学習している中でのつぶやきから出てくる児童の？から学習が発展・展開していくこともありました。
- <sub>6</sub>適切であると思った。図1がとても分かりやすく、イメージが持ちやすかった。授業の中で生まれる「問い」から授業が進み、既習事項をもとに教科の「見方・考え方」を働かせて解決を図る。そして、まとめの中で新たな資質・能力を得たことを実感する。その流れを繰り返していくことで、教科の資質・能力が積み重なっていくと思った。
- <sub>7</sub>図のおかげで「自ら問う」と「見方・考え方」の関連が少しつかめました。既習の中で培った「見方・考え方」をもとに、自ら問い、問題を解決することによりまた「見方・考え方」を確かなものにしていけると思う。
- <sub>8</sub>既習事項を用いて、課題を見つめ新たな本時の問（めあて）に気付くという活動を行ってきた。児童も課題を見て前時と違うところに気付いたり、課題から前時の方法で解決できるか考えたりしていた。「何が違うのか?」「今日は何を学習するのか?」など、細かな問いを含めて考えれば、問が見方・考え方の原動力となっていると感じる。
- <sub>8</sub>課題を見つけ、その解決に向けて主体的に考え、自らの問いをもって解決していく力をつけていくことはとても大事だったと思うし、各教科でそのような子供を目指す取り組みができたと思う。
- <sub>9</sub>答えを問うのではなく、方法や見通し・考え方を問う問い（問うべき問い）を

投げかけるようにした。また、できるだけ多様な考え方を拾い、それぞれの考えの良さに着目して、どういう見方に基づいて考えたやり方なのか、みんなで考え合うようにした。

- <sub>10</sub> 高学年になると受け身で授業に参加する児童が増えます。そのような子供たちも自ら問うことができるようになれば、もっと主体的に授業に参加できると思います。今年一年を通して、やはり「問うべき問いを問う」これこそ大事だと確信しました。

「自ら問う」については継続的に研究を行っているため、記述を見ても明らかのように、かなり浸透してきたようである。新 COS で出された「見方・考え方」に似ているが、それよりも広義であると捉え、図1 (P6 参照) のようなポンチ絵で示したところ、理解がしやすかったようである。話はそれるが、授業においても図や表を用いて示すことを心がけたいものである。

授業における「問い」は、児童のつぶやきから生まれる場合が多い。これからも、児童の声を大切にす学級の雰囲気作りをすることと、「問うべき問い」につながるつぶやきが出せるための教材研究を行い、日々の授業を行っていきたい。

### (4) しかけについて

- <sub>1</sub>子供が必然性を感じ、やる気を喚起するような課題設定の工夫をできるだけ心がけた。
- <sub>2</sub>導入の中で、児童が意欲を持って課題に取り組めるような仕掛けを考えた。児童にとって身近な話題を出したり、前時の感想などから疑問を拾い、授業の導入に生かしたりした。児童が進んで考える姿や、本時の目標に近づくことができるようなめあての設定を児童が行う姿などが見られた。今後も目標を達成するための授業のしかけを考えていきたい。
- <sub>3</sub>算数であれば、問題の中で必要な情報（数値）を選択して解く問題を出したり、

反対にどこが分かれば解けるかといった問いを出すようにした。子供は、数値を選んだ時点で、その理由を書くようになった。問題の中にある数の操作的な立式だと、あまり根拠なく立式してしまうので、説明が書けない場合があった。

- <sub>4</sub>相手意識を持たせる課題を設定しました。
- <sub>5</sub>教師のしかけはどんな授業でも大切だと思う。児童が主体的に学び、自ら問うて学ぶためには、やはり導入が大切であると思い力を入れてきた。いかに興味関心を引くか、どれがけ高い課題意識がもてるかが大切だと思う。
- <sub>6</sub>子供が自力解決できるための既習事項の確認（見通し）を必ず行った。
- <sub>7</sub>既習との違いを問うこと。違いがあっても今までのやり方がつかえるのか、使えない場合どのように工夫したらよいか考えるようになった。
- <sub>8</sub>課題把握の場面では、子供たちが課題をつかみやすいように、その課題に応じてイラストや資料、図など必要に応じて用いた。また、言葉と図や式と関連図けることができるように板書を工夫したり、関連付けを意識させたりした。
- <sub>9</sub>児童の意見を別の児童に説明させること。あえてわからないふりをし、もう一度説明させる。
- <sub>10</sub>あえて誤答を言ったり、「はかせ」に反するやり方を提案したりし、もっとよい方法を引き出す。
- <sub>11</sub>「しかけ」ではないかもしれませんが、児童の考えの訳をきくように意識していました。また児童の考えを教師の方で説明するのではなく、他の児童に説明させたり、図を見て式を考えたり、自らで解決しようとする気持ちを持てるよう意識しました。成果としては、自分の考えのときに理由を言える児童が増えたり、言葉や図で計算の過程をノートに示そうとする児童が増えました。
- <sub>12</sub>しかけの一つとしてホワイトボードを活用して、話し合い活動の深化を図りました。高学年になり、発言する児童が固定化されつつあったため、全員が主体的に授業に取り組めるよう「ホワイトボードミーティング」を授業に取り入れまし

た。具体的には「発散（黒字）→収束（青字）→活用（赤字）」という流れで行い、パターン化を図りました。さまざまな教科で行うことで、考察内容に深まりが見られ、主体的に授業に参加する児童が増えたように思います。

- <sub>13</sub>児童の学習意欲を高めるために、工夫した授業を考えることができたと思います。
- <sub>14</sub>変化を嫌う児童がいるため、同じようなりズムの授業になるようにしました。
- <sub>15</sub>TTという形で授業に関わらせてもらっているが、普段の授業において先生方の授業の工夫が子供たちの学習意欲に大きく影響する事を実感します。

これらの意見を時系列で整理すると、○<sub>1</sub>～○<sub>5</sub>は導入のしかけ、○<sub>6</sub>～○<sub>8</sub>は見通しのしかけ、○<sub>9</sub>～○<sub>12</sub>は比較検討でのしかけ、○<sub>13</sub>～○<sub>15</sub>は授業全体における内容であった。また、先生方の授業実践シートから見えてきた「しかけ」をまとめると、次のとおりである。（詳細は「授業実践シート」の項へ）

#### 導入・見通し

- ・算数…「身近な話題を課題にしたり、具体物を提示したり、動作化したりして興味関心を持たせる」「根拠を問いやすい課題提示にする」「既習を確認し、解決の見通しを持たせる」「既習と未習の違いを明らかにする」「児童がめあてをつくれる場面設定にする」など
- ・外国語活動…「FETとHRTのやり取り（small talk）をきっかけに本時のめあてを持たせる」「既習と未習の違いに気付けるようにする」「スモールステップでデジタル教材を提示する」など

#### 展開（自力解決・比較検討）

- ・算数…「ヒントカードを活用する」「皆で同じ表現方法で解決する」「具体操作を全員で行う」「多様な考えや表現を扱い、それらを関連付ける」「考え方の共通点や相違点を問う」「小集団で考えを共有する」「既習と未習を関連付け、統合的に考える」など
- ・外国語活動…「対話する両者が英語を使いやすくなるようにカードを用いる」

「ホワイトボードを活用し、英文を見ながら発表する」「FET と HRT が積極的に活動に関わり、評価を行う」など

#### まとめ, 終末

- ・算数...「めあてとまとめを対応させる」「具体操作と筆算形式を結びつける」「言葉だけでなく、多様な表現を用いたまとめを行う」など

#### 板書等

- ・算数...「多様な考えや表現を構造的にまとめた板書」など
- ・外国語活動...「本時で表現させたい文は見せないようにする」「絵カードを効果的に掲示する」など

今年度も多様な「しかけ」が行われたことにより、子供が自ら問う環境をつくり出すことができたといえる。しかし、ここに記している以外にも、無意識に行われていたり、新たに見つけることができたりする、たくさんの「しかけ」が存在するはずである。来年度、さらに多くの「しかけ」を行い、研究主題に迫っていきたい。

#### (5) 家庭学習について

- <sub>1</sub>自分でやってみようという学習習慣が身についてきたと思う。
- <sub>2</sub>自主学習については取り組む児童は、ノートも 5 冊以上になり、内容もよく考えバラエティーにとんでいる。宿題以外にも取り組むことができるようになってほしいと思いながら働きかけている。
- <sub>3</sub>家庭学習カードを使って、一日の家庭学習の見通しと振り返りを簡単に行っている。連絡帳を書く時間を利用し、家庭学習カードに今日の学習内容を記述させ、家で学習を行った後にできたかどうかの○×を書かせる活動を続けている。家庭からの話では、5分ほどで学習を終わらせてしまう児童もいるようなので、中・高学年のように、学習時間などを決めることの大切さを感じた。

○<sub>4</sub>内容としては、理科や社会で各県の特産物を調べたり、家庭できになった単語や物についてお家の人と調べてノートにまとめたりしてくる児童も少ないですが、います。しかし、ほとんどの児童が漢字やかけ算などのドリル的な内容を行っています。

○<sub>5</sub>毎日行っている児童が多く、内容も多様である。今後も色々な家庭学習ができるように支援していきたいです。

○<sub>6</sub>1年かかったが、全員が家庭学習に取り組めるようになった。内容は様々で、個人差が大きい。漢字練習ばかりしている児童もいるが、予習復習をしたり、授業の中で疑問に思ったことを調べたり、意識が高く自ら意欲的に学んでいる児童も多く見られるようになった。継続したい。

○<sub>7</sub>家庭学習の習慣化は、ほとんどの子ができるようになっている。が、内容については個人差が大きい。授業からの発展、疑問、もう一度一人で解いてみるなど授業との関連で家庭学習ができると良い。そのために、友達の手帳を回覧したり紹介したりして、イメージをもたせたい。また、家庭学習の積み重ね(クラスのノートの合計など)をクラスの頑張りとして実感できるといいと思う。

○<sub>8</sub>私のクラスでは、週に4日以上家庭学習を行うことを呼びかけています。習い事やドリルなどとの関係でなかなか自学ノートに取り組めない児童が多いです。宿題として自学ノートを1ページとするときもあります。そのときには全員が出します。

○<sub>9</sub>指導を入れると9割の児童が自学ノートに取り組みました。(1割は言っても出さないです。)しかし、少し気を抜くとだんだん未提出が増え、また指導…という繰り返しの様な感じでした。宿題+自学=家庭学習という認識をもっと持たせるべきだと反省しています。また、児童にとって励みになるような試みをすればよかったとも思っています。

○<sub>10</sub>自ら新しい課題を見つけることが苦手な児童のために、プリントを用意してお



き、そこから選んで持って帰り学習してくるようにしました。だいぶ定着しました。

○<sub>11</sub> 11月からの取り組みですが、宿題に加えて音読や計算カード、漢字練習に取り組む姿が見られました。自学ノートに問題を書いてもらって取り組む児童も数名います。毎日取り組む習慣がついてきていると思います。

○<sub>12</sub> 11月より1年生も家庭学習カードに取り組み始めた。上に兄弟がいる子は自学ノートにも取り組み始めた。それを学年だより等で知らせる中で、自学ノートにも取り組み、それを学年だより等で知らせる中で、自学ノートに取り組み始めた子供たちもいた。全体的に見て、よく取り組んでいる子供たちが多い。

家庭学習については概ね定着してきたようである。課題は、○<sub>4</sub>～○<sub>7</sub>にもあるように内容に個人差があることと、○<sub>8</sub>にあるようにやらない児童が固定化されているという点である。内容面での課題を解決するためには、○<sub>3</sub>のように「家庭学習スタンバイ」の時間を設けること、○<sub>7</sub>のようにノートの回覧がよい取組といえる。実施面での課題を解決するためには、○<sub>7</sub>のようにクラス目標にするといった取組もよさそうである。また、学年やクラスによって取り組み方が違う実態も見えてきた。学校で統一した取組をした方が、保護者への理解を高めることができる。来年度への課題である。

### 3. 方法について

#### (1) 授業研究会の持ち方について

○<sub>1</sub> ブロック1の研究授業は良いと思います。

○<sub>2</sub> ブロックごとの研究授業。良かったと思う。

○<sub>3</sub> 良い。発達段階に即した研究が深められた。

○<sub>4</sub> ブロックで取り組むことで、授業案検討がやりやすかったと思う。

○<sub>5</sub> よかったと思う。もっとたくさんの先生方の授業を参観させていただきたいと

思った。

○<sub>6</sub> 授業研究も各ブロックで見せていただき勉強になりました。

○<sub>7</sub> 今回はブロックで授業を見に行くということがなかなかできなかったです。校内研として大きくもった授業は見に行くことができました。

●<sub>8</sub> よかったです。が、授業者にならないと、どこか他人事のように思ってしまうことが自分としての反省です。授業をつくることこそ最大の学習であると思います。ゆえに、「みんなが授業者となり、研究授業をすること」こそ、理想の形であると思います。(あくまで理想ですが。)

○<sub>9</sub> ワールドカフェの研究会は、限られた時間でたくさんの意見が出せる、とても良い方法だと感じた。

○<sub>10</sub> ワールドカフェ方式について、参加できなかったり授業者だったりで…すみません。ただ、グループごとにたくさんの意見が出て勉強になりました。指導案自体に書き込むのもよいと思います。

○<sub>11</sub> ワールドカフェ形式、面白かったです。道德の時間に1年生でもこの方法でやってもという題材があったのですが、1年生なので説明だけで多く時間を取られるので、まだ実際にはやっていませんが、どこかで生かせたらと思っています。

○<sub>12</sub> ワールドカフェは学年・ブロック関係なく、いろんな先生方とお話できて良かったです。

○<sub>13</sub> 良かったと思います。

○<sub>14</sub> 指導主事のお話もとても勉強になりました。

本年度は、低・中・高ブロックによる研究授業を1本ずつ行った。

◎ 低学年 阿部 一美 (1学年 算数「くり上がりのあるたし算」)

◎ 中学年 佐藤 弓子 (4学年 外国語活動「Do you have a pen?」)

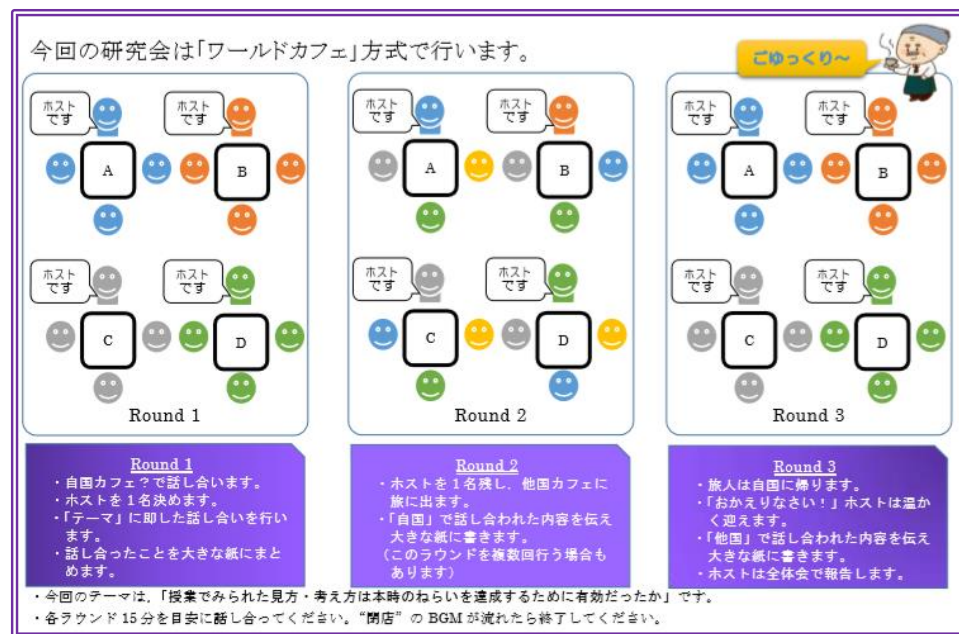
◎ 高学年 角田 大輔 (5学年 算数「小数のわり算」)

研究授業の回数は、よいという回答があった一方で、もっと見たいという回答もあった。これから、若手教師が増えてくるため、授業を見たいというニーズが増え



てくるだろう。そのため、「見せる場」の保障をすることが急務であると感じている。研究授業ではなくても、気軽にお互いの授業を参観できるような環境作りをすることが必要かもしれない。

また、研究会は「ワールドカフェ」方式で行った。(下図参照)



これについては、よいとの回答が得られた。「ワールドカフェ」方式で行うと、通常の研究会形式よりも多く発言ができることや、いろいろな意見が聞けるよさがある。今回は指導案を拡大コピーし、そこに時系列で授業の長短を書き込みながら議論をしていった。しかし、核心に迫るところまで議論ができない場合もあった。「テーマ」に即し、焦点を定めた話し合いにするための方策を考えていくのが課題かもしれない。

## (2) 授業実践シートにまとめる方法について

- <sub>1</sub>ポイントを押さえた形式であり見やすいと思った。
- <sub>2</sub>良いと思います。それぞれの先生方の実践を簡潔にまとめていただき、自分の実践にもいかせるため。
- <sub>3</sub>適切だったと思います。
- <sub>4</sub>自分自身の振り返りにもつながり、また、他の先生方の実践も、しかけと一緒に見ることができるのでよいと思った。
- <sub>5</sub>授業について、自分で振り返ることができる面がいいと思います。
- <sub>6</sub>1枚にまとめられて見やすく分かりやすい方法だと思う。
- <sub>7</sub>自分で何をしてきたか、振り返ることができて良かったと思います。
- <sub>8</sub>とても良いと思う。先生方の実践が分かりやすくまとめてあって、とても参考になる。
- <sub>9</sub>見やすくいいと思います。
- <sub>10</sub>特支は、算数外国語以外の参加になりすみません。見せていただき勉強になります。
- <sub>11</sub>校長先生のおっしゃる通り、これが実践集になってとてもいいと思います。
- <sub>12</sub>一人一実践という形式なので、個々の力にはなるとは思います。ただ、若い先生方が増えていく中で、学年で同じ指導案を考えて、授業する時間は同じ単元で時間をずらしてやるみたいな方法も良いかなと思った。ふだん、なかなか時間が取れなくて、様々な教科について授業の進め方を指導しているものの、こちらでこうやるよと教えることが精一杯な状況である。もし校内研で夏休みを利用して学年の若い先生に指導案を自分で考えてもらう時間が設けられて、それをそれぞれの一実践につなげられるといいなと思った。

昨年度より、授業実践シートを用いて一人一実践のまとめを行ってきた。A3用紙1枚にまとめるので、自身の実践のポイントを絞って書く必要がある。また、他者も見やすい。○<sub>11</sub>のように、授業実践シートを蓄積し、本校研究の財産となって

いくことを期待したい。多様な実践をしていけば、より豊かなものになっていくと感じている。

### (3) 履歴シートについて

- <sub>1</sub>毎回の感想を記録しておくことで、忘れていた自分の思いが振り返ることができて貴重なものになった。書き記すことの大切さを感じた。
- <sub>2</sub>前回のことなどを振り返ることができるので良いと思います。
- <sub>3</sub>教師も学んだことを振り返り整理していくことで研究内容が残り、力となって積み上げられていくと思う。
- <sub>4</sub>その時に何を学んだか、時間がたっても振り返ることができたと思います。校長先生や教頭先生、角田先生からのコメントを頂いて、さらに勉強になりました。
- <sub>5</sub>これまでの自分自身の成長を見ることができてよかった。コメントも励みになって嬉しかった。
- <sub>6</sub>その日に自分が勉強になったことなどを振り返ることができよかったです。校長先生、教頭先生、角田先生からのコメントがとても勉強になりました。
- <sub>7</sub>その日の研究の振り返りとして、書くことは大切であると感じた。研究主任や管理職の方は全員にコメントするのは大変だと思うが…。そのコメントも勉強になります。
- <sub>8</sub>自分の学びの足跡として一言感想を残すと、振り返ることができるので良かったと思います。でも管理職・研究主任の先生方の負担は大きかったのではないのでしょうか。
- <sub>9</sub>とてもありがたかったですが、コメントくださる先生のご負担は大丈夫でしたか？
- <sub>10</sub>校長先生方に見ていただくということもあり、緊張しましたが、コメントをいただくと嬉しく思いました。子供たちのノートにも一言コメントを書こう！と思

いました。

●<sub>11</sub>コメントを入れていただくのは大変だと思う。

今年度は校内研究の後に、教師自身が感想を書く活動を取り入れてきた。授業後、児童が学習感想を書くのと同じように、その時間の学びを再度振り返る時間が有効であったとの回答が多く得られた。校内研に関わる教師一人一人が目標を持ち、自分なりにまとめを行い、それを記すことで、教師自身が主体的に研究を行うことができたと考えている。さらに、管理職と研究主任のコメントが好評を得た。この取組は来年度も継続していきたい。

## 4. その他

○来年度に向けてですが…学習指導要領が2020年度完全実施となります。そのため教科書が変わるのはもちろんですが、評価規準も変わるため『教育課程』づくりを行わなければなりません。ある程度ゆとりをもって準備をしていかないと大変だと思います。カリキュラム・マネジメントを全職員が理解し国母小の教育課程づくりが進められるよう校内研の一部に組み込んでいただけるとありがたいです。

来年度は、新COSの完全実施に向けた準備年度となる。2年間をかけて新COSの内容を読み解いてきたが、来年度はそれに加えて本校の実態に応じたカリキュラム・マネジメントや、外国語活動をはじめとする教材教具の整備などをしなくてはならない。来年度も協働しながら、目の前の教育課題に取り組んでいきたい。

## 5. 研究を終えて

今年度は、算数と外国語活動に的を絞って研究を進めた。目的は新 COS に記されたことの中でも「見方・考え方」の具体的な姿を探ることであった。算数では、既習をもとに学習をつくり出すこと、多様な表現や考えを出すこと、考えの根拠を探ること共通点や相違点を問うことなどの成果が得られた。外国語活動では、課題提示の工夫をすること、やり取りの際にメモを有効活用することなどの成果が得られた。一方で、アルファベットを提示し、それらを読ませて発音することの是非について議論がなされた。また、FET と HRT が事前に打ち合わせする時間を確保することが難しいことや、FET の発音をより多く聞かせる場の設定、さらには評価の事など、外国語活動については、様々な課題が残されている。

新 COS に書かれていることは、従来の日本が育成を目指してきた学力に、OECD の「キー・コンピテンシー」の学力観（技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求に対応することができる力）が加わったものと解釈できる。知識・技能、表現力や思考力を身に付けさせるだけでなく、それらの活用の仕方や、自分自身で問題に気づき解決に向かう意欲、さらには多様な集団における人間関係の構築などを育成しなくてはならない。今、学びの大きな転換期を迎えている。このように考えると、2 年間に得られた成果だけでなく、まだまだ多くの「育成を目指すべき資質・能力」があるといえる。

来年度以降も、自ら問いを持つことができる子供を育成するために、われわれができること、すべきことを問い続け、主体的に研究を行っていきたい。